



TITLE:

獨逸ノ植民的運動ノ回想

AUTHOR(S):

山本, 美越乃

CITATION:

山本, 美越乃. 獨逸ノ植民的運動ノ回想. 經濟論叢 1915, 1(4): 616-621

ISSUE DATE:

1915

URL:

<https://doi.org/10.14989/126905>

RIGHT:

學大科法學大國帝都京

叢論濟經

號四第

卷一第

論說

●收益ト生産費トノ關係

●專賣ト戰後財政

●經濟學認識論ノ若干問題(三完)

雜錄

●危險分散主義ノ原則

●經濟主義ニ就テ

●英吉利ノ農政問題(二完)

●享保年間ノ米價調節(二完)

雜報

●經濟的進化ト人口法則(二)

●戰爭利得稅新案

●獨逸帝國全體ニ亘ル半官企業組織新說

●英國ノ戰費ト經濟

●獨逸ノ植民の運動ノ回想

●相續稅ト家族制度

●本多利明ノ著書ニ就テ

●こんらい教授逝ク

法學博士 河上 肇

法學博士 小川郷太郎

法學博士 左右田喜一郎

法學博士 神戸 正雄

法學博士 戸田 海市

助教授 河田 嗣郎

法學士 本庄榮治郎

講 師 米田庄太郎

法學博士 小川郷太郎

法學博士 神戸 正雄

助教授 河田 嗣郎

助教授 山本美越乃

法學博士 神戸 正雄

法學士 本庄榮治郎

助教授 河田 嗣郎

獨逸ノ植民の運動ノ回想

助教授 山本美越乃

獨逸ノ植民の活動ノ當初ニ於ケル實況ヲ以テ之レヲ我が國ノ現狀ニ比較スル時ハ、其事情ノ酷似セルモノ二三ニシテ止マラズ、就中植民の活動ノ當初ニ於テ有盛ナル植民地ハ既ニ他國ノ

頗有ニ歸シ餘ス所治ント無カリシガ如キ、冒險的ノ活動ニ關シテハ過去ノ歴史ヲ有スルモ所謂植民の活動ニ付キテハ近世ノ國家の精神及ビ愛國の熱情ニ基因セルガ如キ、政府當局ノ植民事業ニ對スル態度ハ寧ロ消極主義ニ傾ムカントスルニ反シ、民間有志ハ常ニ積極主義ヲ把持セントスルガ如キハ、其ノ主ナルモノニシテ、此間ニ處シテ武斷主義又ハ軍國主義ノ直接間接ニ植民地ノ獲得ヲ援クルアリ、是等ノ事情ハ英、佛等ノ先進植民國ニ於ケルヨリハ、寧ロ後進國タル獨逸ニ於テ其傾向ヲ求メ得ベキモノ少ナシトセズ、故ニ Evans Lewin 氏ノ The Germans in Africa (Oxford Pamphlets, VII, 1914) ヲ讀ミ、適マテノ平素ノ感懷ニ合致セル點アルヲ發見シ、左ニ其ノ一部ヲ紹介スルコトセリ。

獨逸ニ於ケル植民の運動ノ發達ハ、聯邦諸州ノ政治の統一ヲ成就セシメタル戰亂ノ前後ニ於ケル國民ノ愛國の熱情ト其ノ軌ヲ一ニシ、全ク近世ノ國家の精神ノ發動ノ結果ニ他ナラズ、固ヨリ獨逸ハ既ニ第十七世紀ニ於テぶらんでんぶるぐ大選舉侯ノ保護ノ下ニ、ぎねあ沿岸ニ商業の植民ノ計畫ヲ爲シタルコトアリトハ云ヘ、此實驗ハ遂ニ不成功ニ終リ久シカラズシテ該植民事業ハ全ク拋擲セラルルニ至リシヲ以テ、近時ノ植民の運動ノ原因ヲ茲ニ求メントスルガ如キ

ハ當ラズ、加之當時獨逸ハ植民事業ニ對シテハ何等ノ準備ヲ有セズ、國內ハ政治の連鎖ノ極メテ薄弱ナル聯邦諸州ニ分割セラレ、爲政者ハ偏狹ナル地方の精神ニ依リテ支配セラルル以外ニハ、毫モ國家的ノ大目的ニ向テ協同スルコトヲ爲サズ、又斯カル目的ニ向テ協同スルコト能ハザリシナリ、此間ニ處シテ僅カニ、將來ノ普魯西王國ヨリ更ニ進ミテ獨逸帝國ノ中堅ヲ形造ルニ至レル、ぶらんでんぶるぐノミ獨リ積極政策ノ遂行ニ力ヲ用キタリト雖トモ、侯ノ努力モ内ニ在リテハ海軍力ノ缺乏、外ニ在リテハ當時既ニぎねあ地方ニ通商上ノ利權ヲ獲得セル列強諸國ノ存スルアリシヨリ、終ニ全ク失敗ニ了レリ、蓋シ當時既ニ優者ノ地位ニ在リシ佛・英・丁・蘭等ノ諸國ハ、亞弗利加沿岸ニ於ケル彼等ノ勢力範圍内ニ、此一新小國ノ侵入スルヲ快シトセズ、殊ニ主トシテ侯ノ探險事業ヲ助ケタル航海者及ビ船員等ノ供給者タリシ和蘭トハ、利害相反スルモノアリシヨリ、あきしむ(西亞じゝるど・コーすど)ニ近キぐるゝす・ふりーどりつひ

すぶるぐ及ビ其ノ他ノ地方ニ於テ失敗ヲ招キタル結果、遂ニ植民事業ヲ斷念セザルヲ得ザルニ至レリ、其ノ後該事業ハ殆ンド國民ノ念頭ヲ去リ、唯僅カニ愛國の植民論者ニ歴史上ノ一事例ヲ供スルニ過ギザリキ。

爾來約一世紀半ノ間ハ獨逸ハ亞弗利加沿岸ニ一ノ植民地ダモ有セザリキ、然ルニ大植民國タル英國ハ、其ノ後獨逸ガ急轉直下、或ハ歐洲ニ於ケル最大陸軍國トナリ、或ハ世界ノ各地ニ雄飛シテ通商上ノ利權ヲ獲得セントスルノ事實アルニ拘ハラズ、斯カル時勢ノ激變ヲ洞觀スルノ明ナク、又其ノ恐ルベキ結果ヲ齎ラスニ至レル植民の運動ノ發展ニ注意スル所ナカリシナリ、獨逸ニ於ケル植民論者等ガ有力ナル國民ノ後援ヲ得、終ニびすまるくヲ動カシテ植民地ノ爭奪ニ加入スルノ決心ヲ爲サシメタル當時ニ於テスラ、柏林駐劄英國大使おどろさせる氏ノ如キハ『獨逸政府ハ植民地ヲ要スルヨリハ寧ロ兵士ヲ要ス』"The German Government feel more the want of soldiers than of colonies." (Sept. 18,

2000)ト信ジタリ、是レ蓋シびすまるくカ『植民事業ハ獨逸ニトリテハ恰モ一ノ襪衣ダモ有セズシテ、徒ラニ高貴ナル皮裘ヲ其ノ身ニ纏ハントスルハ一らんどの貴族ニ似タリ』ト言ヘル真意ヲ誤解セルニ基ツケルモノニシテ、當初ハ植民事業ニ多大ノ希望ヲ囑セザリシビすまるくモ一朝此ノ目的ニ向テ活動スベキ時機ノ到來セルコトヲ覺ルヤ、驕然從來ノ態度ヲ一變シ、最モ進歩シタル植民論者ノ熱誠ヲ以テ領土ノ擴張ニ努力スルニ至レリ。

今近時獨逸ガ海外發展ヲ企ツルニ至レル四大原因トモ稱スベキモノヲ指摘セバ凡ソ左ノ如シ

- (一) 過剩ナル自國ノ製造品ニ對スル新市場及ビ其ノ工業上ニ必要ナル熱帶產物ノ新供給地ヲ求メザルベカラザルニ至レル、國內ニ於ケル不斷ノ經濟的壓迫ノ増加。

- (二) 新ナル國土ニ於テ經濟的活路ヲ發見センガ爲メニ年々母國ヲ去リ、或ハ北米ニ或ハ南米ニ移住スルコトニ依リテ、終ニ國籍ヲ脫スルニ至ル多數ノ獨逸國民ヲ吸收シ得ベキ植民地ノ建設ノ必要。

- (三) 海國の勢力ノ扶植ニ依リテ對外利權ヲ獲得ニ參加シ、能フヘンバ漸次他國ニ代リテ制海權ヲ掌握セントスル愛國的热情。

(四)

りびんぐさん、すたんれー其ノ他英、佛、獨、伊等ノ探險者ノ發見以來、亞弗利加大陸ニ集中セラレタル國民ノ注意心、等ハ其ノ主タルモノナリ。

此ノ如クシテ獨逸ニ於ケル植民の運動ハ、有力ナル學者及ビ實際家ニ依リテ巧ミニ指導セラレ、又其ノ主唱者等モ、植民地ノ建設ハ國民ノ繁榮ト國權ノ伸張ヲ期セント欲セバ避クベカラザル自然ノ徑路タルベキヲ確信セリ。

彼ノあだむ・すみすヲ師トセル、有名ナルふりーどりつひ・りすとノ如キモ、亦該運動ノ最初ノ有力者ノ一人ニシテ、彼レハ凡ソ一國民ハ同一人種又ハ同一言語ヨリ生ズル、共通のノ感情ニ因ルヨリハ、寧ロ物質的ノ利益ニ因リテ合同スルモノナルコトヲ論シ、此理ヲ推シテ更ニ獨逸關稅同盟ノ設定、交通機關殊ニ鐵道網ノ完成、商船ノ建造、全獨逸國ヲ代表スベキ領事ノ任命、植民地ノ獲得、及ビ過剩人口ノ植民地集中等ノ必要ヲ包括セル、一種ノ理想的經濟觀ヲ國民ニ示セシガ、是等ノ理想ハ其ノ最後ノモノヲ除ク外ハ殆ンド全ク實現セラルルニ至レリ。

りすとノ理想ハ更ニ一八六七年ニ、あるんすと・ふりーであるニ依リテ完成セラレ、彼レハ東亞及ビ太平洋上ニ植民地建設ノ必要ヲ提言セル書中ニ、對外通商・軍艦及ビ植民地ノ三者ハ互ニ離ルベカラザル密接ノ關係ヲ有シ、若シ其ノ一ヲ缺ク時ハ他ノ價值ヲ減ズルニ至ルベキヲ論ジ、且幾多ノ富源ヲ有セル臺灣島ノ如キハ日本ノ之レヲ領有セザルニ先ダチ、英ノ香港ニ於ケル通商の活動ニ對抗センガ爲メニ、宜シク獨逸自ラ之レヲ占領セザルベカラズトサヘ主張スルニ至レリ。

りすと及ビふりーである等ノ理想ハ、當時ノ識者ノ意見ヲ代表セルモノト言フモ不可ナク、從テ容易ニ國內ニ普及シテ一大勢力ヲ形成セシガ、殊ニ其ノ理想ハ軍國主義ノ宣傳者タル、はいんりつひ・ふをん・とらいちけノ推獎ヲ博シタリ、後年べるんはるでい、びゅーろー、ふをん・である・びるつ等ノ如キ軍國主義ノ論者ニ對シテ、其ノ途ヲ備ヘタルとらいちけノ如キハ、獨逸ノ將來ニ對シテ遠大ナル理想ヲ有シ、全獨主義ノ

極端ナル鼓吹者タリシナリ、彼レハ世人ガ如何ニ英國ノ自由主義ヲ謳歌スルモ、其ノ勢力ハ既ニ過去ノ遺物ニ過ギザルコトヲ公言シテ、獨逸ハ須ラク英國ノ弱點ニ乗ゼザルベカラズトナスモノノ如ク、若シ獨逸ニシテ南部亞弗利加ニ獨立ノ植民政策ヲ行フノ決心ダニアラバ、茲ニ必ラズ獨逸ノ利益ノ衝突ヲ惹起スノ機會ヲ發見スルコトヲ得ルニ至ルベシト云ヘリ。

要スルニとらいちけハ、獨逸ノ植民の活動ノ最モ危險然カモ眞面目ナル鼓吹者ナリシト雖トモ、當時ノ論者中ニハ又彼レト其ノ意見ヲ同クセル者決シテ尠ナカラザリキ、即チ多數ノ論者等ハ、未ダ他國ノ有ニ歸セザル所ハ正當ノ手段ニ依リテ獨逸之レヲ領有シ、以テ自國ノ植民地トナスヲ妨ゲストセリ、例ヘバ植民の運動ニ於テハ一大勢力ヲ有シ一八九一年ニ彼レノ死スルヤ、獨逸植民事業ノ父ト稱セラレシふあぶりーノ如キモ、既ニ一八七九年ニ公ケニシタル有名ナル冊子 (Beitrag Deutschland der Kolonien, Göttingen, 1879) 中ニ、獨逸モ亦植民的ノ活動ニ加

入スベキコトニ關シテ、健實且熱烈ナル所論ヲ試ミタリ、即チ彼レハ一方ニ於テハ植民主義ノ論者ノ持論ヲ紹介シツツ、他方ニ於テハ力メテ涉外的ノ政策ニ干與セザラントスルビすまなくノ謬見ヲ悲シミ、植民事業ハ帝國ノ經濟的發展及ビ通商の利權ノ擴張ニ、必要缺クベカラザルモノナルガ故ニ、茲ニ着眼セザルハ、獨逸ノ富強ヲ來スベキ重大ナル一要素ヲ忘レタルモノト云ハザルベカラズト論ゼリ。

此ノ如ク一八七〇年以後、幾多ノ論者ハ植民の活動ノ必要ヲ提唱シ、其ノ熱誠ハ遂ニ全國ヲ風靡スルニ至リ、政治學者・經濟學者・神學者・宗教家・實業家及ビ旅行家等、社會ノ各階級ヲ通ジテ苟クモ思ヒテ國家ノ前途ニ致ス者ハ凡テ之レニ援助ヲ與ヘシガ、獨リ政府官憲ノミハ該運動ヲ贊クルコトヲ躊躇シタリ、是レ蓋シ其ノ結果ハ延テ國際間ノ關係ヲ困難ナラシムルニ至ルベキヲ虞レタルニ因ル。

然ルニ恰モ當時移民協會又ハ組合ヲ經テ、過剩ナル人口ノ米國ニ移住セル者極メテ多ク、一

八八二年ニハ殆ンド其ノ頂點ニ達シ、二十五萬人以上ノ移住者ヲ生ズルニ至リシカバ、是等ノ實狀ハ深ク上下ノ人心ヲ刺戟シ、終ニ獨逸國旗ノ下ニ、新タニ自國民ノ移住ニ適スベキ地方ヲ發見センコトニ決意セシムルニ至レリ。

就中ハモむるぐ及ビふれーめんノ商業會議所ハ該運動ヲ援ケ、前者ハ一八八三年外務省ニ長文ノ報告ヲ送り、亞弗利加内地ニ於テ斷エズ増進シツツアル獨逸ノ利權及ビ獨逸商會ノ土民ニ對スル密接ナル關係等ニ關シテ特ニ政府ノ注意ヲ促シ、其ノ他移植民協會ノ如キモ最モ熱心ニ該運動ノ後援者トナリ、此ノ如クニシテ獨逸ニ於ケル植民的ノ活動ハ、最初ハ全ク默認セラレ、後ニハ隱然保護ヲ受ケ、最後ニハ公然之シヲ助勢スルコトニヨリテ、『他國ノ成功セル所ニハ獨逸モ亦其ノ勝利ヲ期セザルベカラズ』トノ希望ヲ實現シ、終ニ一八八四年初メテ亞弗利加ニ植民地ヲ獲得シタルヨリ以來、茲ニ列強諸國ノ植民的活動ノ一大渦中ニ投ズルニ至レルモノナリ。